

Title	支那工業の現状に就て ( 二 )
Sub Title	
Author	及川, 恒忠
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1924
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.18, No.3 (1924. 3) ,p.422(118)- 444(140)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19240314-0118">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19240314-0118</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 支那工業の現狀に就て(二)

及 川 恒 忠

本文は前號を承くるものにして、能ふ限り原文の結構に沿ひたれども、圖表挿入の位置並に之が説明に關する辭句は適宜に修削取捨を加へたり。茲に諒察を請ふ

### 自動發展時期

民國元年より十年に至りて、政争兵亂年之れ無きは無く、清末の實業獎勵政策を擧げて盡く之を破壊し、以て繼續せしめたるもの無し。各省の軍人官吏は特に其省内の實業を保護し能はざるのみならず、且つ之に加ゆるに削剝摧殘を以てす。兵匪の刦掠、官吏の敲詐、幾ど相習ひて風を成し、之を受くる者亦同じく倖免す可らざるの天災と視たり。故に政府の實業に對待する態度が與えたる影響に就て言はんか、過去

六十年の中も清末の九ケ年は黄金時代にして、民國の十ケ年は暗黒時代たり。是れ當局者の賢不肖によりて分かれたる所、國體と關係あるなし。吾人共和を酷愛すると雖も、其諱を用ゆる所無きなり。幸にして歐洲戦争發生し、歐米の商品は來源斷絶し、遠東の商業に従事せる者亦國に歸りて戎に従ひ、日本商品又二十一ヶ條の要求を以て國人の排斥を受く。こゝに於て支那の工業は千載逢ふ難き自動發展の機會を得たり。試に輸出入統計に就て之を觀るに、民國二年(一九一三年)の輸入總額は五億七千餘萬兩にして、次年は五億六千九百餘萬兩なり。既にして歐戰略は滅したるに因り、民國四年(一九一五)には跌落して四億五千四萬兩に至り、約五分の一を減じ、歐戰終はれるの期に在りても未だ民國二年の舊額に復せざりき。輸出は民國二年に在りては總額四億零三百萬兩にして、次年

は歐洲戦争初めて起りたるに因り跌落して三億五千六百萬兩に至りしも、以後は即ち逐年増加し、歐戰終はれるの期に在りても皆民國二年の舊額を超過したり。此時期に當りて國內の需要は未だ嘗て減少せざりしかば、國內市場に對する供給の缺乏と、當さに輸出す可き貨物の増加とは共に本國の工業に依頼せざる可らざりき。宜なるかな此時國內實業の進歩は一日千里なりしなり。故に民國三年より七年に至る五年の間、工場を成立を登録(註冊)したる者他の時期に較らべて多數とす。此れ誠に天與の機にして、果して上下心を一つにし、力を併せて之に赴きたらんには、未だ嘗て日本の坐して漁人の利を收むるが如きを不可とせず、自ら暴棄に甘ずるが如きこと無かりしならん。然るに第二次革命の後之に繼ぐに袁氏の稱帝、安徽直隸の交鋒を以てし、民に寧日無く、安くんぞ生息教養の暇

やあらん。惟だ少許の通商口岸の工業、外人の庇蔭を藉りて尙ほ自由に發展し、歐洲戦争の餘潤に沾ふを得たりしのみ。日本の歐戰に因りて造成せる百萬富翁は千百を以て計かるに視れば、相去ること道里を以て計かる可らざるなり。歐戰既に終りて險象即ち生じたり。九、十の兩年は實に支那工業の恐慌時代と爲す。製鐵工廠は積貨山の如く、人過ぎるも問ふ無く、爐を閉じ機を停むるに至り、紡績工場は經費大にして多くは利なく、上海數十年來の三大油廠も竟に同年倒閉し、其他の工業も亦皆消沈せり。歐戰に因りて富を致したる實業家にして營業失敗し、重ねて旋渦に入りたる者、乃ち時に聞く所ありたり。支那の工業が戦争參加より得たるの利にして、能く永久に存在し曇花一現たらざりし者は、甚だ少なきを竊かに恐るゝなり。

夫れ戦後の工業恐慌は米、日皆之を有し、異

分の一を減じたり。

とするに足らず。同じからざるものは、米日は  
發展甚しきに過ぎ、勞銀(工資)高きに過ぎた  
るを以て、繼續するに難く、收束す可らざるの

本期中政府の工業に對する施設は少許の官制  
變更ありたるを除けば、竟に政策の言ふ可きも  
なし。民國三年張謇農商部に長たるの時、其の

勢あり。支那の工業は本來發展に限あり、勞銀  
も亦遠く米日の増高せるに如かず、一方徒らに  
市場の外國貨物増加せしを以て需要と市價とは  
皆減じ、遂に不振を形らはしたるなり。其中ち  
一部分は實は投機事業の影響受けたるものなり  
と雖も、然かも工業の根本にして動搖すれば必  
ず其能力は持久する能はず、獨り投機を責むる  
を得ざるなり。故に米、日の恐慌は常に盛なる  
も暫らく衰ふの象にして、支那の恐慌は暫らく  
盛なれども復た衰ふの象なり。試に九年度の對  
外貿易に就て之を曰へば、輸入は前年に比較し  
て六分の一を増し、過去六十年中最高の額を示  
めしたりしが、輸出は反て前年に較らぶるに六

『棉鐵政策』を宣佈し、『工業保息費章程』(工  
業獎勵の爲め政府に於て一定の期間内、特定の  
資本利子を補給する旨を定めたる規程)を定め  
て製造を提唱し、二千萬元を以て其基金に擬し  
たり。當時耳目一新、頗る朝氣ありたりしも、  
幾くもなくして張氏は袁が帝制を謀圖したるに  
因りて職を去り、棉鐵政策亦陳迹となりぬ。民  
國五年袁氏の帝制將さに成らんとし、好を國民  
に見らはさんと欲し、政府財政困難の際に當り  
たるにも拘らず、預算中に竟に商工業振興資金  
一千五百元を列したり。然るに雲南義を起し、  
袁未だ帝たらずして死し、所謂『振興商工業資  
金』も亦帝制とともに同じく滅し、繼任の執政

者此を紙上空談の預算に並らぶることすら亦再  
び聞く可らざるに至りたり。民間の提唱事業は  
たゞ民國十年に上海の高總會が設立したる商品  
陳列所あるのみ。設備收羅皆國中の僅かに見る  
所。元より『南洋勸業會』の如く規模博大なる  
能はずと雖も、然かも一つは官辦にして一つ  
は商力に出で、一つは短期の觀覽に供し、一つ  
は隨時の參考に備ふるものにして性質既に異れ  
り。日と同じうして語る可らざるなり。

### 三、新工業の統計

工業の統計は工業の數量的歴史たり。最近五  
十年に於ける支那工業の盛衰を研究せんと欲せ  
ば、自ら其統計を知らざる可らず。惜かな吾  
國の統計事業は尙ほ幼稚時代に在り、政府の刊  
行せる所は惟だ『農商統計』(農商部出版)であ  
るのみ。しかも僅に出して第五次に至り、調査  
手續又完備せず、據りて信史と爲すに足らざる

なり。實業界自ら刊するものは紡績業に『全國  
紗廠一覽表』あるのみにして、此外間ま見らる  
ものは大抵書籍新聞に散見せるものなり。外  
人刊する所の者は英文の The China Year Book  
あり、已に出して一九二二年に至る。日本人與  
ふる所の『支那年鑑』は僅に出して第三回に至  
れども(第四回のものあり)、收羅の宏く備はれ  
る日人の年鑑英文に勝るに似たり(譯者は反  
對に觀察す)。惟だ工業に關するものは仍ほ多く  
農商統計を轉鈔せり。外人の支那工業を論ずる  
の書も亦日本人著はす所を以て詳盡と爲す。『支  
那の工業』最近支那經濟(善生永助著)、『支那  
の工業と原料』及『支經濟大全』等の如し。其  
收羅宏博にして西人固より及ぶ能はず、支那人  
も亦如かざる可き甚だ遠きを自ら知れるなり。  
五十年の統計を求むるに至りては、たゞ海關  
報告の輸出入統計に就き五十年來の工業盛衰を

略ぼ窺ひ得るのみ。本篇は其重要なるものを撰  
びて之れを述べたり。故を温ね新を知り、往を  
察し來るを知り、以て工業の進歩を求めんとせ  
ば必ずや過去の統計を研究して其成敗の因を得  
可きなり。此の理明なること甚し、甚だ願ふら  
くは吾國實業團體早く此事に着手し、日本人を  
して越俎代謀せしむる勿からんことを。

(第一表) 全國工廠の成立年別

年 別	全國工廠數	民國五年調 全國工廠數	登錄工廠	登錄公司 總數
光緒二十九年以前	一二四一五	七三九〇	二四	一
光緒三十	一一六四	七九四	九	八
三十一	四四二	三三六	一八	四七
三十二	六三一	四八九	三五	六五
三十三	四二三	四二〇	三六	四九
三十四	五一三	四五八	二三	五五
宣統元年	一六四六	一一三四	二六	六一
二	一一〇三	五八九	二六	七四
三	八二一	六五七	一八	三五

民國元年	二〇〇一	一一八二	一七	一〇
二	一一四九	一〇一九	三七	二三
三	一〇二七	八九一	三七	八五
四	六七二	六七二	五〇	九九
五	五五六	五五六	三三	九八
六			三四	八〇
七			二九	八八
八			二三	一一二
九			四七五	一六七
總計	二四七六五	一六九五七	四七五	一一六七

備 考 譯者曰ふ、第一行目の全國工廠數は本文中に述べられたる如く民國元年の農商統計に著者が取捨を加へたるものにして、第二行目の全國工廠數は民國五年度の農商統計なり。

表中第一行の全國工廠成立年別は、民國元年の農商統計に就き其矛盾せる處を改正し、且つ二年以後四ヶ年に於ける毎年の新工廠を附け加へて編成したり。而して元年以前に閉鎖せる工廠數は皆其内に在らず。

第二行は民國五年調査(農商部の)の工廠成立年別にして、其總數一萬六千九百五十七なり今之を元年度の農商部調査の總數二萬四千七百六

(一) 工廠設立年別(工業會社)  
新工業の盛衰を代表するに最も足るものは、毎年設立せらるゝ工廠數に如くは莫し。たゞ此種統計は全國の遺算なきを求めんと欲するも亦得難し。註冊(登錄)せる工廠に至りては農商部に詳録あるを以て甚だ信す可し。今分録するに下の如し。

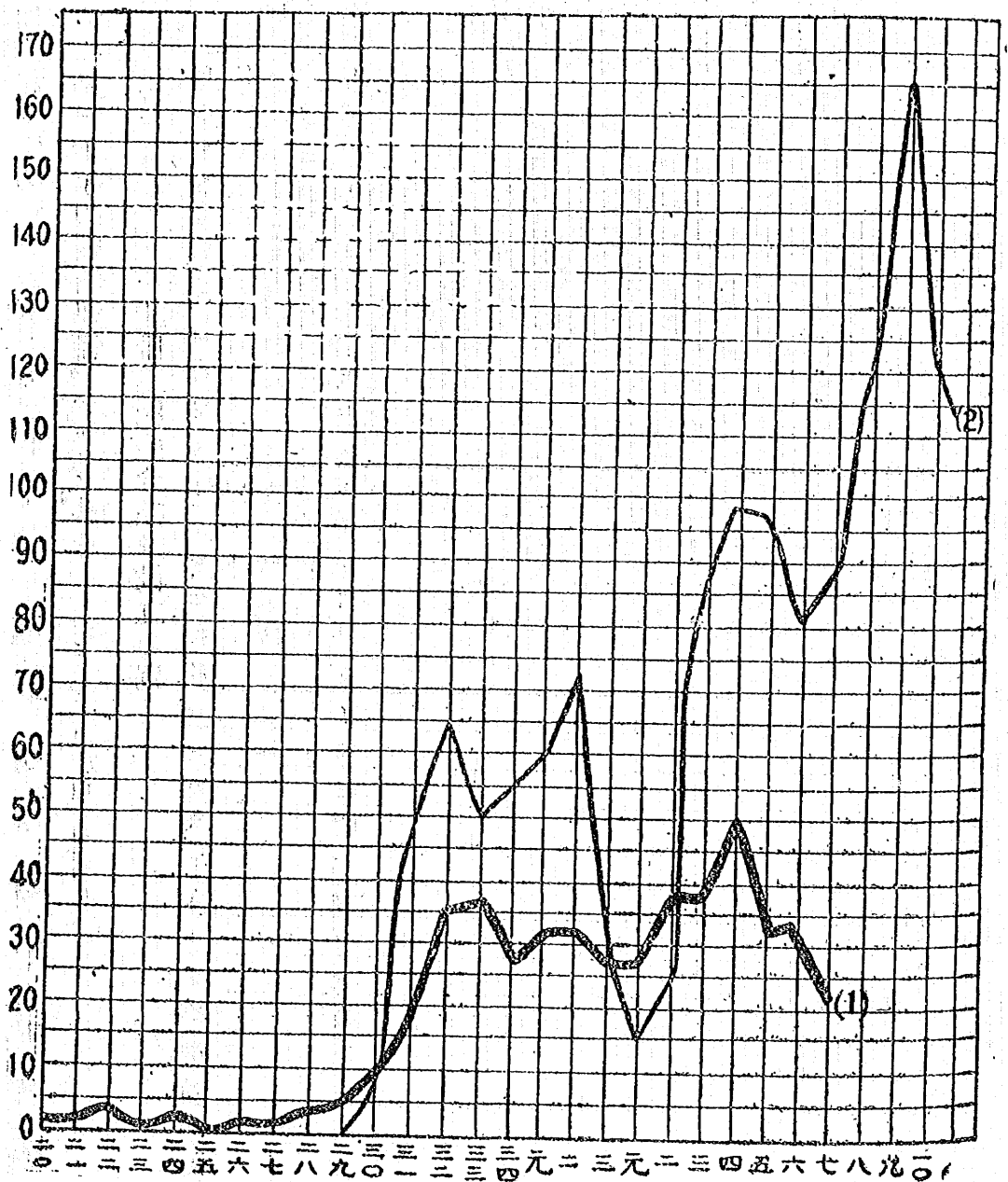
の中ち光緒三十年に成立したるものは、凡そ一千零三十九(前掲第一表第一行の數字と異なる所は著者が先きに附言したるが如く著者自身が農商統計に改正を加へたる爲なり)なるに、民國二年度の調査は反て増して一千一百六十六としたり。既に死滅せる工廠復活するの理絶無なれば、必ず民國元年の調査の周からざる爲めなること疑無し。故に前述の統計は僅に参考の用に供す可く未だ據て定論を爲すに足らざるなり。

表中の第三行は毎年註冊せる工廠數にして、第四行は毎年註冊せる公司(工業會社以外の會社を曰ふ)の總數なり。其趨勢は左記第一圖に觀ることを得。

光緒二十年より二十八年に至る間は外國人興業の時期にして、毎年の工廠數甚だ少し。二十九年より宣統三年に至る間は工業發展の第一峰と爲す。三十二年及三十三年に盛にして、三十

四年に至り稍々衰へたり。蓋し光緒母子世を遊きたるの影響とす。宣統元年復た興起の象ありて、宣統三年乃至民國元年に至りて復た衰へたり。辛亥革命の影響なり。

政府獎勵の時期此に至りて終りを告げ、工業發展の第二峰に入る。即ち自動發展の時代なり以前の兩時期に在りては、工廠の線と註冊公司總數の線とは起落大に相應はしきを致す。即ち工業の盛衰と全國實業の盛衰とは、其趨勢大に相同じきを致したるなり。然るに自動發展の時期に至りては情形略ぼ異れり。即ち工業は民國四年に盛にして(歐洲戰爭の第二年目に當る)民國七年に衰へたるに(歐洲戰爭停止せられたる時に當る)、全國の註冊公司是民國四年五年に盛にして、民國八年九年に至りては乃ち大に盛となり、幾ど尋常の數に倍し、工業と完全に背馳せり。此即ち全國に取引所(交易所)、信託公







上記第二表は註冊工廠の分類並に其設立年別にして重出兩岐なる者あり、選擇を加へんとするを示めず。此れ農商統計を始めとし各書の無きも、參考乏しきに苦しむ。工業の各名稱は英文所にして、今、遠東時報の一九二一年十月に出より翻譯したるが故に、亦恐らく他書と盡く同したる『支那工業公司増刊』が摘篇せるものに じうし能はざる可し。讀者意を會せば可なるの従ひたり。第一表の註冊工廠數は即ち此表より 來るを得たるなり。原書中、工廠の設立年別に

(第三表) 註冊工廠種數分期比較

工業種別	光緒二十九年ヨリ 三十四年(六年)		民國二年ヨリ 四年(三年)		民國五年ヨリ 七年(三年)	
	公司數	資(元)本	公司數	資(元)本	公司數	資(元)本
一 生絲・紡織	五	一〇八五,〇〇〇	一	五〇,〇〇〇	五	八八三,〇〇〇
二 棉紡績染	三	九,三三三,〇〇〇	八	八,〇〇〇,〇〇〇	一七	一七,三三〇,〇〇〇
三 麵粉	三	三,三三〇,〇〇〇	七	一,六三四,〇〇〇	一七	二,八五〇,〇〇〇
四 陶磁器	二	一,八五〇,〇〇〇	一	—	一	—
五 麥巴コ	二	八〇〇,〇〇〇	一	—	二	九〇,〇〇〇
六 棉米	五	八五〇,〇〇〇	—	—	一	五〇,〇〇〇
七 電業	七	四,一〇〇,〇〇〇	三	一,六三四,〇〇〇	三	三,三三三,〇〇〇
八 榨油	九	一,八五〇,〇〇〇	二	一,九〇〇,〇〇〇	三	三,三三三,〇〇〇
九 石鹼蠟燭	六	六〇〇,〇〇〇	一	—	五	二,七五〇,〇〇〇

工業種別	光緒二十九年ヨリ 三十四年(六年)		民國二年ヨリ 四年(三年)		民國五年ヨリ 七年(三年)	
	公司數	資(元)本	公司數	資(元)本	公司數	資(元)本
一〇 ヲツチ	三	六三三,〇〇〇	三	五七〇,〇〇〇	九	六三三,〇〇〇
一一 ガラス	二	一,一三〇,〇〇〇	—	—	—	—
一二 鐵工	二	一〇,三三三,〇〇〇	—	—	—	—
一三 罐詰	—	—	—	—	—	—
一四 製茶	—	—	—	—	—	—
一五 炭酸水	—	—	—	—	—	—
一六 印刷	—	—	—	—	—	—
一七 製帽	—	—	—	—	—	—
一八 製製	—	—	—	—	—	—
一九 製製	—	—	—	—	—	—
二〇 製製	—	—	—	—	—	—
二一 製紙	—	—	—	—	—	—
二二 水道	—	—	—	—	—	—
二三 建築	—	—	—	—	—	—
二四 建築	六	一,六三三,〇〇〇	—	—	—	—
二五 交通業	—	—	—	—	—	—
二六 雜業	三	二,一三三,〇〇〇	三	一,四三三,〇〇〇	四	三〇〇,〇〇〇
總數	三三	五二,三三三,〇〇〇	三三	三三,三三三,〇〇〇	三三	五二,三三三,〇〇〇

第三表は全國工廠の分期比較を示めず。『支那の工業と原料』(安原美佐雄著)の摘編せるもの 合して一表とせり。而して銀兩は農商統計の例 に従ひたり。原表は三部を分ちたれども、今、

に依り庫平六錢六分七厘を以て銀元に換算した  
り。表中掲げたるもの盡く工業會社たるにあら  
ず、表末の交通と鑛業の如きは、固より本篇の  
範圍の内に在らざるなり。又雜業なる項目は何  
業を含む所なりや更に知る可らず。たゞ分けた  
る所の時期は比較に甚だ便なるが故之を録した  
り。第一期は光緒二十九年より三十四年に至る  
政府獎勵時期の極盛時代にして、第二期は民國  
二年より四年に至る自動發展時期の初盛時代な  
り。第三期は自動發展時期の極盛時代とす。而  
して第三期に於ける毎年平均の公司數は第二期  
の三倍にして、第二期も亦第一期に倍せり。其  
増加の速かなる見る可し。たゞ毎期、各廠の平  
均資本は反て第一期を以て最大と爲す。是れ漢  
冶萍公司(鐵工の中にあり)の資本は二千萬元に

して、平均數をして高きを加へしむるに足れる  
に依ると雖も、然かも此數を去るも、仍は他の  
時期に比較して多きを爲すなり。(約二十五萬  
元)  
三期中繼續して發展せる工業に五あり。而し  
て其速度は各々同じからず、茲に第四表に分述  
したり。生絲紡織、電業、マツチの三業の資本  
は、三期を通じて見るに、第一期に在りて最も  
大なり。大低は官商合辦なるが故に資本雄厚た  
るなり。又第二第三の兩期に於ては、工廠數増  
したりと雖も、資本は反て減少せり。易言すれ  
ば即ち小工廠多きを増したるなり。棉業の進歩  
は最も速にして、資本も亦増加甚だ多し。麵粉  
之に次ぐ。

(第四表) 五種註冊工業分期比較

工業種別	第一期		第二期		第三期	
	毎年平均 公司數	毎公司平 均資本	毎年平均 公司數	毎公司平 均資本	毎年平均 公司數	毎公司平 均資本
生絲紡織	五一六	二一七、五〇〇元	一一三	五〇、〇〇〇元	一六七	一七六、五〇〇元
綿・紡織染	四	三八五、〇〇〇	六	四四八、〇〇〇	五、六七	一、〇一八、〇〇〇
麵粉	二	一九四、〇〇〇	五、六七	九九、三〇〇	五、六七	一六八、〇〇〇
電業	一、一七	五九〇、〇〇〇	四	一三九、〇〇〇	七、三五	一六〇、〇〇〇
マツチ	三二六	二〇九、八三三	四、三三	三〇、五〇〇	三	七三、〇〇〇

(二) 工廠内容の比較

工廠の内容に關する統計はたゞ農商統計の中  
にのみ見るを得可し。然れども元年以前、五年  
以後は皆得可らず。政府も社會も日に工業を提  
唱するを言ひて、而かも此點に注意せず、其效  
知る可きのみ。左に掲ぐる第五表は全國工業動  
力の情形を示めすものなり。五年度の調査全か  
らざるが故に、全國を代表する能はず、大概に  
して之を曰へば、動力を用ゆる工廠の數は逐年  
増加し、動力を用ひざる工廠の數は増減甚だ微  
なし。而して註冊したる工廠は皆動力を用ゆる

ものに屬す、蓋し資本比較的に多ければなり。  
動力機關と馬力數も亦逐年増加す。然れども之  
を他國に較ぶるに尙ほ逃ばざること甚だ遠く五  
年度の機關總數は二千零三十にして、馬力總數  
は十一萬一千八百五十一なり。上海セイント、  
ジョーンズ大學の社會學教授レーマー氏謂ふ、  
全國の動力使用工廠の資本は米國の辟支堡の大  
に及ばずと。比言實證するに易からず、かゝる  
統計尙ほ得可らざればなり。たゞ馬力を以て之  
を言へば、米國の一ナイアガラ瀑布が現在既に  
用ゆる馬力數は二十八萬左右に在りて、全支那



の需要の二倍に供して余り有るに足る。

(第五表) 工廠動力比較年別

工場數	動力使用		民、元	民、二	民、三	民、四	民、五
	動力不用	動力用					
合 計	二〇、三八六	二二、三六六	三六〇	四八八	四九〇	一六、四六七	一六、九五九
蒸氣機	馬力 二〇、七四九	二二、七二三	三三七	三五七	三五七	二〇、七四六	一六、九五九
電 機	馬力 二〇、三五二	四三、四四八	五五、一一〇	三三二	五三、五九七	三三三	六四二
其他	馬力 二、八五三	二〇、一九八	一一、一五三	一四六	一六、一〇五	二六一	八一七
其他	馬力 二、二四〇	二、二二〇	四七六	一、一五三	一六、一〇五	三八一	一七、二六九
其他	馬力 一、三四〇	二、二二〇	九、〇九二	一、二七七	一、二七七	三八一	一、〇七〇
其他	馬力 一、三四〇	二、二二〇	九、〇九二	一、二七七	一、二七七	三八一	一、〇七〇

下記第六表は各省の動力狀況及職工數を示すものなり。動力を用ひざる工廠は浙江省を以て第一とし直隸、四川、江西之に次ぐ。手工業發達の區なればなり。動力を用ゆる工廠は江蘇省第一にして、山東、廣東之に次ぐ。機械工業發達の區なればなり。職工の數は江蘇省最も多く、浙江、廣東之に次ぎ、支那の工業最盛の省を爲せ

り。第八表は各省工廠(註冊)の比較を示めすものにして之に依れば、江蘇省は幾ど各類に於て皆多數を占め、直隸、浙江、廣東之に次ぎたり。表末に附したる資本の比較は仍ほ遠東時報の工業公司増刊より分類計算して之を得たり。恐らくは原書の記載と必ずしも盡く合せず。第七表は即ち註冊公司の總數を示めしたり。大體に於

て、註冊公司最も多き省は其註冊工廠の數亦最も多し。工業と他の實業との關係や、固より此

(第六表) 各省の動力狀況及職工數

省 別	工場數	動力使用	動力不用	石炭消費額	男女職工數
京 兆	二、二六二	六	二一六	六、一三五	六、四八三
直 隸	二、二六七	二六	二、二四一	一〇、一六二	四三、一八三
奉 天	七、八三	二四	七、五九	八〇、八〇六	一一、九〇八
吉 林	六、三七	六	六三一	二二、七一九	一〇、九一一
黑 龍 江	二、七六	六	二七六	二一、六四六	三、七五一
山 東	九、三六	一一	八、一五	一五、八八六	二四、七七四
河 南	八、四二	三	八、三九	四、九四一	一四、八九一
山 西	一、二九四	一	一、二九三	五〇、六八〇	一四、〇四七
江 蘇	一、二八八	一四九	一、一三九	一一二、〇三九	一四二、六七八
安 徽	三、八六	一	三、八六	六、〇九六	二四、六八〇
江 西	一、六一〇	一	一、六一〇	二八六、一六九	六〇、八〇二
福 建	一、一二九	一	一、一二九	一一二、六六三	二二、〇九五
浙 江	二、五〇一	一三	二、五〇一	三、八〇五	七三、七三九
湖 南	五、三二	一七	五、三二	二六〇	三六、七九〇
湖 北	六、八六	六	六、八六	二六〇	二二、六六一
陝 西	四、六五	一	四、六五	三、〇四九	五、〇五八
甘 肅	二、三四	一	二、三二	一、〇一六	二、三二九
新 疆	三、一	一	三、一	一、〇一六	四一七

四	川	一、九五五	四	一、九五五	一八四、〇九二	三八、二〇一
廣	東	八五六	一〇一	七五五	一、九三八、三二六	五四、一八一
廣	西	七四		七四		九五三
雲	南					
貴	州	一七				
熱	河	一七三		一七二	四一、四二〇	六〇六
察	爾	一二七		一二七	五、二三一	一、五八六
合	計	一九、三二一		一八、八四三	一、二〇四、五八二	一、〇〇一
						六一九、七二九

(第七表)

註冊公司註冊工廠省別比較

京	兆	七九	一二	二二三
直	隸	七四	四五	一四四三
奉	天	二五	一九	九四五
吉	林	五〇	一四	五七〇
黑	龍	七五	三一	二五四
山	東	三六	一四	七八五
河	南	三四	九	七七七
山	西	二八五	一五五	一三六〇
江	蘇	三二	一二	四七三
安	徽	二六	六〇	一六五〇
江	西			

福	建	五二	二〇	一〇八四
浙	江	五六	四二	一四六五
湖	北	三二	一一	四六七
湖	南	四	一九	五四九
陝	西	五	三一	三九六
甘	肅	〇	一	一五二
新	疆	〇	〇	二九
四	川	四〇	一七	三七三二
廣	東	七五	三三	一〇九一
廣	西	五	一	九六
雲	南	四	〇	一〇五
貴	州	一	〇	八〇
熱	河	六	〇	一八〇
察	爾	四	〇	一四六
綏	遠	四	〇	二五
海	外	一二〇二	三七五	二二三二
總	計			

備考 註冊公司註冊工廠數は皆農商部統計によれり。工廠總數は五年度農商統計により、西南五省は別に三年度の調査を用ひたり。

(第八表) 註冊工廠省別(民國八年度)

總額	京直	天泰	林吉	江龍	東山	南河	西山	江蘇	徽安	西江	福建	江浙	北	南湖	西陝	肅甘	疆新	川四	東廣	西廣	南雲	州貴	外海
資平均	三三、〇〇〇	二六、〇〇〇	二六、〇〇〇	二六、〇〇〇	二六、〇〇〇	二六、〇〇〇	二六、〇〇〇	二六、〇〇〇	二六、〇〇〇	二六、〇〇〇	二六、〇〇〇	二六、〇〇〇	二六、〇〇〇	二六、〇〇〇	二六、〇〇〇	二六、〇〇〇	二六、〇〇〇	二六、〇〇〇	二六、〇〇〇	二六、〇〇〇	二六、〇〇〇	二六、〇〇〇	二六、〇〇〇
資總額	三、八二九、〇〇〇	一、〇八八、〇〇〇	一、〇八八、〇〇〇	一、〇八八、〇〇〇	一、〇八八、〇〇〇	一、〇八八、〇〇〇	一、〇八八、〇〇〇	一、〇八八、〇〇〇	一、〇八八、〇〇〇	一、〇八八、〇〇〇	一、〇八八、〇〇〇	一、〇八八、〇〇〇	一、〇八八、〇〇〇	一、〇八八、〇〇〇	一、〇八八、〇〇〇	一、〇八八、〇〇〇	一、〇八八、〇〇〇	一、〇八八、〇〇〇	一、〇八八、〇〇〇	一、〇八八、〇〇〇	一、〇八八、〇〇〇	一、〇八八、〇〇〇	一、〇八八、〇〇〇

資本總額	火柴・紙	水	煉鹽	石	製	製	製	製	製	製	製	製	製	製	製	製	製	製	製	製	製	製	製	製
資平均	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	
資總額	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	

(三) 工廠の職工

工廠中、男工は約總數の百分の六十五を占め、女工は百分の三十五を佔む。工廠の類別を以て

(第九表) 全國職工數年別

民國元年	二年	三年	四年	五年
男工	四二一、九九四	二二九、七九〇	六六一、七八四	六三〇、八九〇
女工	四一八、三〇四	二二二、五八六	六二四、五二四	六四八、五二四
合計	三九一、一二六	三三三、三九八	二四五、〇七六	二二二、一〇三
民國元年	三三四、一五二	二二二、一〇三	五六五、二五五	

(第十表) 工廠職工の逐年比較

工廠類別	民國元年		二年		三年		四年		五年	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
織染	三三八、四七七	二四八、三三四	二六八、三三三	二二九、七九〇	三〇一、六六六	二七二、三〇九	三二七、三〇九	二七二、三〇九	三二七、三〇九	二七二、三〇九
機械及工具	三三、二六七	二六、九七七	三七、五五五	三六、九七七	五八	二五、九六五	一三〇、〇二〇	一三〇、〇二〇	一三〇、〇二〇	一三〇、〇二〇
化學	一五、四三二	九、七四五	一八、〇六六	一〇、四〇九	一三、五五七	一九、七八九	一五、二七一	一五、二七一	一五、二七一	一五、二七一
飲食	二〇、八九〇	一八、七三三	一四、五三六	九、四四〇	五〇、一六六	一五、二七一	一三、四〇八	一三、四〇八	一三、四〇八	一三、四〇八
雜工	五、〇七三	五、〇七三	五、〇七三	五、〇七三	五、〇七三	五、〇七三	五、〇七三	五、〇七三	五、〇七三	五、〇七三
特別	五、七七五	五、〇一〇	九、一六一	九、一七一	三、九七七	三、九七七	三、九七七	三、九七七	三、九七七	三、九七七
合計	六八、七八四	六三、〇九〇	六四、五三四	三二、二二六	三三、三九八	六四、五二四	五六五、二五五			

更に第十一表に就て之を観るに、廣東江蘇の江、熱河、綏遠の三地の工廠には竟に女工な工廠に在りては、女工男工に較らべて多きこと。勞銀は江蘇を以て最高とし、貴州陝西は最低なり。而して男工の勞銀は大抵皆女工より多餘の各省に於ては男工は皆女工より多く、黑龍、く、最も多きものは約四倍余なり。

(第十一表) 各省男女工の數及勞銀

(本表は五年度の農商統計を根據とし、三年度の數もあり)

省別	男工	女工	總數	毎日の勞銀	
				男工	女工
京兆	七〇五七	二五九	七三一六	最高 三〇	最低 一四
直隸	三九三三九	三五一五	四二八五四	最高 二九	最低 一四
奉天	一七六三九	一一〇	一七七四九	最高 三三	最低 一八
吉林	八五六四	三三	八五九七	最高 四五	最低 二〇
黑龍江	三二〇〇	—	三二〇〇	最高 二八	最低 一七
山東	一七七九五	二二二七六	一九九七一	最高 二五	最低 一九
河南	一一二二三	二〇三三	一四二六六	最高 二四	最低 二二
山西	一六二二八	一一六四	一七四九二	最高 二三	最低 一一
江蘇	四四二八六	一〇〇五九四	一四四八八〇	最高 五三	最低 二三
安徽	一一〇八〇	一六二〇四	二七二八四	最高 二四	最低 一六
江西	三六一五七	二三一九	五八四七六	最高 二五	最低 一五

福建	一七二〇二	三四三四	二〇六三六	三七	二二	三三	二二
浙江	五三二六三	二五九〇二	七九一六五	二八	一七	三四	一四
湖北	二二九九二	九〇八三	三二〇七五	三三	一五	二〇	二二
湖南	一四二三三	三六四二	一七八七五	二六	一四	一九	一五
陝西	三五三七	六四五	四一八二	一九	一〇	二三	〇八
甘肅	一五三八	九五五	二四九三	二二	一四	二二	〇九
新疆	三五五	四五	四〇〇	四〇	二六	二二	〇九
四川	四五一四一	八一九八	五一三三九	四七	一四	二二	〇九
廣東	一六一四八	四二二五五	五八四〇三	四六	二四	二二	〇九
廣西	八五三	六四	九一七	四五	二二	二二	一八
雲南	二六九八	一一四一	三八三九	三三	一七	二五	二四
貴州	一五〇七	三六七	一八七四	一六	一一	〇七	〇七
熱河	六七四	二一	六七四	一一	一八	〇七	〇五
察哈爾	一二九四	二一	一三一五	一一	一五	〇八	〇五
綏遠	二七九	二一	二七九	一一	一五	〇八	〇五
總計	三九三、二九二	二四四、二五九	六三七、五五一	二五	一一	〇八	〇五

### 勢州松坂に於ける銀札の沿革(上)

#### 三井 高陽

##### 第一章 概論

###### 第一節 緒言

徳川時代に於ける財政史上重要な地位を有する藩札に關する研究は從來弄錢家乃至好事家の手によりて可成精細なる研究の成れるものなしとせず、或は圖録として或は値附として坊間にてこれが研究の結果公にせられたるものあれど其藩札の發行の財政上に於ける影響又はこれが流通に關する研究の大成せられたるもの鮮し、蓋し藩札は其發行極めて不規則(金屬貨幣に比し)にして其様式種類の頗る多きに亘れると共に弄錢家以外には經濟史研究上左程重要視

せられざりしものあるが故ならむか。

今こゝに記述せんとするは紀州徳川侯の勢力内にありて商業上重要な地位にありし伊勢松坂の銀札の發行事情と其經過を略述せんとするに在り、余の家祖紀藩の御用商人たりし關係上多少當時の狀況を知るに便なる古文書の殘れるを綜合し略其事情を知り得たり、幸にして徳川時代に於ける財政史上の一部門たる藩札の研究の一助ともならば筆者の幸とするところなり。

###### 第二節 紀州に於ける三井氏

今日の三井家が富を蓄積し得たるは嘗に往昔よりの蓄財のみならず、主として近代的商業工業に其資力を應用して得たるもの多きは言を俟たずと雖も往昔に於ては亦今日に於けると等しく種々複雑なる經營法に依り其多様な放資に依りて利を占めたるは人の知るところなるべし。